



生きていてよかったと 思える社会にしたい ～私の研究テーマ～

日本社会事業大学 佐藤久夫さん

障害をもっている胸を張って
生きられる、生きてきてよか
ったと思える社会にしたい。私がこれ
までの研究生活で大切にしてきた思い
です。

学生時代のセツメント活動で、ね
たきりの老人から「あなたは医学部の
学生でしょう。早く死ぬる薬が欲しい
」と言われました。

戦争を体験し、高度成長を支えてき
た高齢者にこんなことを言わせる社会
ではいけないと感じました。その後重
度心身障害児とその姉ともふれあい、
この思いを固めました。

私の研究は、障害者福祉論の中でも
政策系・理論系のものです。

障害の概念とか構造というテーマは
研究生活の最初から重視してきました。
どんな支援が必要かはみんなが研
究していましたが、誰が支援の対象
か、誰が支援を必要としているかは、
あまり注目されていませんでした。

とくに精神障害者や難病患者は病人

だから障害者ではないとされていま
した。そこで、障害とは何か、病気と障
害の関係はどうか、障害者の法的定義
はどうあるべきかなどを研究しまし
た。その成果の一つが『障害構造論入
門』（1992年、青木書店）でした。

障害の概念についてはその後、WHO
（世界保健機構）の国際生活機能分類
（ICF）の作成過程に参加し、2001年
にICFが制定されてからはその活用
のための研究をしてきました。この活用
面はまだ研究が不十分です。

1997年には、日本障害者協議会が
『障害者福祉法への試案』を作成しま
した。私はそのまとめ役でした。障害
種別の3つの福祉法を総合し「谷間の
障害」をなくす、市町村が個別に援助
の必要性を評価する、すべてのサービ
スは義務経費とする、障害のために必
要な支援は無償とする、など2011年
の「総合福祉部会」の「骨格提言」の
原型となりました。

10年あまり後、今度は政府からこ

の方向で法律案をつくってほしいと頼
まれることになりました。この歴史の
進展に驚き、喜びました。

*

現在、障害者制度改革は困難に直面
しています。当初政府が約束していた
通りに進んではいません。しかし、改
革は確実に進んでいると感じます。

戦後60年あまり続いてきた自己責
任・家族責任の制度を、平等な市民と
して暮らすために必要な支援を権利と
位置づける制度に転換する方向性が、
「骨格提言」という形で示されました。

しかもこれは障害者自立支援法に賛
成した人も反対した人も、障害者も事
業者も自治体も、みんなが厳しい議論
の末合意したものです。小宮山厚生労
働大臣もこれを確実に実現したいと約
束しています。

1、2年では成果が出なくても、10
年、20年では変化が生まれます。驚
異な歴史の前進に確信をもちつつ、も
うひとつがんばりをと決意しています。

さとう ひさお 1948年群馬県生まれ。東京大学大学院医学系研究科保健学博士課程では、じん肺を中心に職業病の予防、補償の問題などを研究。1977年に日本社会事業大学の専任講師となり、現在、同大学教授、日本障害者協議会理事、障害者政策委員会委員を務める。共著書に『障害者福祉の世界 第4版』（有斐閣、2010年）など。